



長女の景子は3歳で神経芽腫が見つかり、6歳で天国に旅立った。救えなかった罪悪感はずいぶん話せなかった。

親が子を亡くす逆縁のつらさは亡くなった後も続く。「頑張ってください」と声をかけられても心の中で「これ以上何を頑張ればいいのか」と反発してしまふ。私は景子のこと話さなくなつた。そして今まで以上に働いた。「もう大丈夫」と思ってもらつたかもしれない。でも装っている自分分かつた。

小児がんの支援活動に携わるよつになつた。人助けではない。罪滅ぼしの思いだつた。そこには逆縁を経験し、気持ちを分かち合える仲間がいた。それだけで心が癒やされた。

私と妻が闘病中のことを記録していたノートを参考に文章を書き始めた。一文ごとに情景がよみがえる。景子の声、表情、匂い。涙が止まらなかつた。

約1年かけて原稿らしきもの

ができた。怒り、絶望、悲しみ、苦しみばかりつづつたが、書き直す中で思いが変わつた。「先生が休日の夜に病院に駆けつけてくれたなあ」「大雨の中、看護師さんがハンバーグを買ってきてくれた」。やがて原稿には感謝の言葉が増えていった。

書き上げた原稿は「景子ちゃん ありがとう」という冊子にして、お世話になつた方に感謝の思いとともに届けた。

少しずつ心持ちが変化する中、神渡良平さんの「人は何によって輝くのか」という本を読んだ。「子どもの死ほど深刻な打撃はない。でも親が新しい世界を獲得できたなら子どもは大きなことを成し遂げたことになる。子どもの分まで生きるのです」。目が開かれた。「俺は死を受容しただけで、何もしていない」と思つたからだ。

映画「おくりびと」のモデルとされる納棺夫の青木新門さんとの出会いも転機となつた。青木さんは「人は必ず死ぬから、いのちのバトンタッチがあるのです」などと書かれた詩を読んできた。そして「お嬢さんが残してくれたことを大切にバトンタッチしたいじゃないですか」とほほ笑んだ。私の魂が覚醒した瞬間だつた。

向き合う 子どもの分まで生きる決意